

武道と禅

# 基礎十年

小川 刀耕

近頃は自由々々と言って定石を軽んずる風があるが、定石即基礎を無視した自由はほんとうの自由ではなく、でたらめである。まず定石をがっちり学びこれを手に入れた上で、今まで守っていた定石を抜け出で初めてほんとうの自由があるのである。

これを蚕に例えれば桑以外の物は絶対に食わない。桑のみによって成長し、四眠（注1）を経て今度は桑を化して絹糸となし、自分の口から吐いて自分の体を自分で縛り、繭となって自分の自由を奪いジーンと堪えている。修行の最も苦しい時はこの時である。

この束縛に堪えきる時、今度は繭を自分の口で食い破り、蝶ちょうと化して外へ飛び出る。この時、飛行自由自在の新天地が開けるのである。自主的束縛から自主的自由の世界に出る。これがほんとうの自由である。

百ひゃくしょう姓やるにも開墾十年、一芸をするにもほんとうは基礎十年（注2）である。何事によらず途中で挫折する者は皆、この基礎時代の修行が薄弱のためであると言っても過言ではあるまい。

（『人間禅』9号より）

編集部注

（注1）四眠：蚕が卵からかえって繭をつくるに至るまで4回脱皮すること。

(注2)基礎十年：著者は『現代剣道百家箴』(全日本剣道連盟発行)所収の「剣道と人生」の中で、「事の修行」について次のように述べておられる。

事は技<sup>わざ</sup>です。理を頓悟(真実の自己を把握すること。)しただけでは、実際の場に当たって働けません。そこで悟後の修行が必要なのです。事の修行はまず遠間大技の捨身稽古に全力を尽くすことです。更に進んでは、竹刀稽古と併せて古人が真剣勝負で体得した宝珠が秘められている古流の形とで、間合、殺活の技を真剣に鍛錬工夫すること、特に気の相続、正念相続に命を懸けることが秘訣です。この正念相続こそ正しい剣道の根幹であり、人間形成の嶮関<sup>けんかん</sup>であります。事の段階は悟りは易<sup>やす</sup>く、相続は難しと申す所です。剣道の修行は、事の修行までが基礎で、少なくとも十年はかかり、この「黙々十年」の苦行によく堪え抜くことが大切なのであります。(文責：編集部)

## 著者プロフィール



小川刀耕(本名/忠太郎)

明治34年、埼玉県生まれ。剣道範士九段。警視庁剣道名誉師範。全日本剣道連盟相談役。小野派一刀流免許皆伝。人間禅付属宏道会最高師範。昭和9年、両忘協会釈宗活老師に入門。庵号/無得庵。平成4年帰寂。